わたしを遣わされた方が・・・

奨励	佐藤 泰彦〔さとう・やすひこ〕
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に来た。わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。」

（ヨハネによる福音書　12章44―49節）

私は、同志社大学神学研究科後期課程の佐藤と申します。大学卒業後40年間、中学校・高校の教員を務めておりましたが、定年まで２年を残して大学院に入学し、現在、小原克博先生のもとで研究させていただいております。

私の所属している教会では、信徒が説教をするという伝統がありませんので、皆様の前でお話する時を迎えて、ちょっと緊張しております。

先ほどの『讃美歌』57番「ガリラヤの風かおる丘で」は、説教学の授業で私の順番が来たとき、「佐藤さんの緊張を解いてあげよう」と、関谷先生が特別にギターを奏で、皆さんで歌ってくださったもので、今回も緊張がほぐせればと思って選曲させていただきました。

聖書との出会い

私は、高校生のときに受洗して以来、聖書を個人的に読んだり聖書研究会に参加したりして親しんできました。でも、その読みは、浅いものにすぎなかっただけではなく、間違っていました。聖書の字句の表面だけを見て、山上の説教のこのイエスの言葉はすばらしいなとか、処女懐胎なんてあり得ないとか、昔の人ならともかく、死んだ人を生き返らせるような奇蹟物語を現代の人が信じるわけないよ、というふうに、自分の「出来の悪い頭」だけを判断の基準にして、恐れ多くも聖書を上から目線で裁いていたのでした。このような読み方では、本当のことは何も分かりません。このことに気づいて、私と聖書の関係は大きく変わりました。

神学部の石川立先生は、「聖書はゆっくり読みなさい。退屈するほどゆっくり読みなさい」と言われます。そのお言葉どおり、先生の90分の講義では、並行箇所や旧約聖書の参照も交えて、聖書のほんの数節を進むにすぎません。先生の講義によって、聖書がこんなにも面白いものだということに気づかせていただけました。

ゆっくり聖書を読んで

私が大学院に入学した最初の年のことです。東京の大学から来られていた小川先生の聖書の授業に、法学部生のＴ君が参加していました。彼が、いつも分厚いドイツ語の本を辞書もなしに読んでいるのを見て、ある日、「君は、ドイツ語をどうやってマスターしたのですか」と尋ねました。すると彼は、「ドイツ語は半年集中したら分かります」と答えてくれました。

私は、大学を卒業して以来40年間も外国語に縁のない生活をしていましたので、英語もドイツ語もすっかり忘れていましたし、今さら語学なんてと思っていました。しかし、彼のこの言葉で反省しました。大学院生が英語からもドイツ語からも逃げているのは、ちょっと恥ずかしいですね。そこで心機一転、この日からドイツ語を始めました。それからほとんど毎日１～２時間、辞書を引き引き、ドイツ語のヨハネによる福音書を、３カ月もかかってやっと読み終えました。ドイツ語の力はたいして向上したとは思えませんが、「ここの彼（er）は、イエスのことだろうか、それとも弟子のことだろうか」と考えながらですから、石川先生のお勧めのように、超ゆっくり聖書を読むことになりました。すると、今までは感じなかった、イエスの悲しさというか、辛さというか、必死の思いが、私の心にリアルに響いてきました。

イエスは大声で叫んで言われた

ヨハネによる福音書12章の最初に、「このように多くのしるしを彼らの目の前で行われたが、彼らはイエスを信じなかった」（12章37節）、そして、「とはいえ、議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかって公に言い表さなかった。彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである」（12章42―43節）、とあります。イエスの言葉は、イエスに反対する人びとはもちろん、身内にも、多くの人びとにも正しく理解されなかったのです。イエスに反対する人びとは、ことあるごとにイエスの言葉尻を捉えて追い詰めようとします。それに対するイエスの切り返しは、実に見事というほかありません。また、弟子たちでさえ、イエスの言葉を世俗的にしか理解できず、イエスに叱られたり、諭されたりしています。

先ほど読んでいただきました短い聖書箇所のなかで、イエスは、「わたしを遣わされたお方」、ドイツ語で“der mich gesandt hat”という言葉を、３度も繰り返しておられます。同じ言葉は、聖書の他の箇所にも何カ所か出てきます。この“der mich gesandt hat”のフレーズは、もう私の頭にドイツ語のまま染み込んだほどです。

しかも、イエスは大声で叫んで言われたのです。「分かってくれよ、このことは、わたしが勝手に言っているのではない、私を遣わされた御父からの言葉なんだよ」と。新共同訳聖書にはないのですが、他の訳の聖書では「大声で」とあります。この表現に、イエスの必死の息遣いまで感じられないでしょうか。

御父のお言葉としてお聞きします

イエスが多くの奇蹟を行ない、父なる神からの言葉を伝えても、人びとはイエスを信じなかった。またイエスを信じた人でさえ、神からの誉れより人間からの誉れを優先したという状況は、今の日本の状況と似ているのではないでしょうか。

現在の日本では、イエスが多くの奇蹟を目に見える形では起こしてはいませんが、イエスの導きと恵みによって、多くの教会や多くのキリスト教主義の学校が建てられ、多くのキリスト教の書物が出版され、多くの人の善い行いや祈りと礼拝が捧げられても、主の御言葉を受け容れる人はなかなか増えません。その理由の一つとして、私たちキリスト教徒も、ともすれば神からの誉れよりも人間中心的な価値観に浸りがちになっていることがあるのではないかと、私自身の反省も込めて思うことがあります。

それでも私たちは、聖書をとおして今も私たちに語り続けておられるイエスの言葉を虚心に聴いて、「はい。私は、あなたのお言葉を、あなたを遣わされた御父のお言葉としてお聞きします。それを、そのまま信じます」と、お応えしたいものです。

2013年6月11日　今出川火曜チャペル・アワー「音楽礼拝奨励」記録